朝顔の十一月

夜鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朝顔の十一月

【Ｎコード】
Ｎ０１１６Ｄ

【作者名】
夜鳥

【あらすじ】
朝顔が咲いている。もう冬が近いのに。

国立の小学校に入学したのが８年程前。
当時７才の自分には、とても大きく見えた校舎。
一体どんな事をするのか、とその時の自分は親に聞いた。

「学校は、勉強したり、運動したり、遊んだりして、お友達をたくさん作る所だよ」

そして連れられて行った入学試験で、その門をくぐったのが今の学校との出会い。

小学校生活は楽しかったか、と聞かれれば、自分は大抵『ＹＥＳ』と答える。
５回に２回ぐらいは『ＮＯ』と答えるので、大抵は『ＹＥＳ』。
『どちらとも言えない』という選択肢はない。
曖昧な返答は答えにならない。
いつも問いには「ＹＥＳ」か「ＮＯ」
真か嘘しか振り分けがない。

『ＹＥＳ』の理由は、周りを考えず自分だけの学校生活を考える

と、まぁまぁ面白かったからで。
『ＮＯ』の訳は周りのした言動行為を含んで客観的に見たら、楽しくは見えなかっただろうという理由からだった。

何も国立の学校だからと言って、問題のない生活を送れていた訳ではない。
いじめも当然あった。

クラスでは似通った生徒が固まってグループ化。
主に虐げられるのはその輪に入り込めなかった数人の子で、大体のメンバーは決まっていた。
そして自分も、輪に入り込めない側だった。

低学年の頃。
自分は国語や算数の授業が嫌いで、体育や図工の教科が得意。
作ったり、遊んだり。運動するのが大好きだった。
お昼休みには校庭へ飛び出して仲間とサッカー、放課後にはその仲間と他クラスの子供が入り、大勢でのドッチボール。
図工の時間ではどれだけそれらしく描けるかを自分だけでプチ自由研究したりもした。

自分は、グループ化する人たちとは馴染めない所があった。
『自分たちだけ』の話とか、『自分たちだけ』の秘密基地とか、囲われた関係の中で居心地がいいとは思えなかったのだ。
『自分たちだけ』というのは他の子の知らない秘密で、それだから意味が有ったのだろうけども自分はその時、秘密を作るのは好きではなかった。

単純に皆で笑っていられればいいんじゃないかと思っていた。

そう思っていた頃、事は始まった。

クラスはグループであふれていた。

自分はあっちのグループを行ったり、こっちを行ったりと放浪し、楽しく過ごしていた。

運動の得意だった自分は、運動会や行事では何時も名の挙がった子だったから、皆自分を良く知ってくれていた。

そんな自分とは正反対の地味で頭の良い、か弱そうな女の子が、ある日こう言ってきた。

「お友達にならない？」

自分はそう言われて友達になるのは初めてで、そして新鮮だった。

皆で遊ぶうちに、いつの間にか友情とか言われるものが芽生え、親しくなる。

というパターンでこれまでの友好関係は築かれていたからだ。

もちろん自分は『ＹＥＳ』と答えた。

特に断る理由もなし、それにその頃の自分は、友達になりたいと言う子を断るなんて言う選択肢、つまり『ＮＯ』が有るとは全く持って思ってもいなかったのだ。

そしてその子と、その子の友達と遊ぶようになった。
前に遊んでいた様々なグループの子達とも満遍なく遊んでいたが、その子は良く遊びを思いつく子だったので次第に遊ぶ時間は減っていった。
そしてその子は段々頭角を表してきていた。

我が侭で、飽きっぽい。
そして計画をたてたり、思いつきを行動するのが楽しいと思う。

それがその子の性格だった。
家に遊びに呼ばないともう遊ばないと言い、私以外と遊んだらもう話さないと定めて、何時でも自分と遊ぶように言いつけた。

自分はその時に気づけば良かった。
自分に心を開いてくれたのかと思っていた。

けれどそれは間違いだった。

彼女は自分の逃げ場を、少しずつ潰していたのだった。

ある日、彼女はいつもと同じく

「私と私の友達とで遊びましょう」

と言った。

自分はこの子の考えだす遊びが好きだったので、いつもと変わらず『ＹＥＳ』と答えた。

その日の遊びはいつもと変わっていた。

仲間内ではなくて、他のグループの子も計画に入っていたのだ。

おかしいとも思わなかった。

『遊び』は彼女の思いついたルールで行われるゲームだったのだから。

他の子が次々と、彼女が『任務』と呼ぶゲームを終えてくる。

自分が彼女からその『任務』の内容を告げられたのは、休み時間も終わりに近づいた頃だった。

「あなたはあの子を突き飛ばして帰ってくるだけよ」

「あの子？」

「最近入ってきたあの子。ツインテールにしてる子よ。最近色々うるさいの。私に『我が侭』とか言って」

「なんで？」

「『なんで？』それぐらいわかるでしょ。それが任務の内容だからよ」

突き飛ばすのはいけない事だと知っていた。
でもその行使は『ゲーム』なのだと言われた。
だから自分は、それは『ゲーム』の許容範囲なのだと思った。

「早く行きなさいよ！」
「ホラ、昼休みが終わっちゃうじゃない」

彼女の友達が背中を押す。
ゲームだからと言われて、自分は渋々うなずいた。

柱の陰から押し出され、自分は戸惑いながらその女の子の背を突き飛ばした。

「きゃぁっ」

その女の子は呆気なく倒れ、自分は『ゲーム』を終えたのだと思い、彼女のもとへ帰ろうとする。
すると彼女は、柱の陰から姿を消していた。
他の子達も同じだった。

そして、その自分に突き飛ばされた女の子は、突き飛ばした自分

を見て言った。

「先生に言うからねっ！」

そして自分は気がついた。

やはり、してはいけない事だったのだ。

「どうして突き飛ばしたりしたんだ。倒れたら危ないんだぞ！　わかってるのか！？」

「…あの子にしてこいって言われた。ゲームだって」

有りの侭を話した。

考えれば、彼女の『任務内容』がおかしかったのだから。

「あの子に罪を被せるのは止めなさい！　あの子は君と遊んだりしてないと言ってる。あの子と遊んでいた他の子もそうだと言っていた。君の意思で突き飛ばしたんだろう！」

「ちがう」

「じゃあなんであの子と遊んでいたのにあの子は遊んでいないと言っているんだ？　おかしいだろう。君はあの子と遊んでいなかった。

あの子は他の子と裏庭で遊んでいたと言ってる。教室にいる訳がないじゃないか！」

「……」

「それにあの子を見た子もいないんだ！　君のせいでこの子は怪我をする所だったんだぞ。嘘をつくのは止めなさい！」

それこそ嘘だ。

彼女はついさっきまでそこにいた。
彼女はいつも通りそこにいて、『任務』を言い渡していた。
彼女の他の友達だって見てたはずだ。
何故自分の事をなかった事にしようとする？

何故。

「…嘘じゃない」

「この子は君が謝れば許すと言ってる。あの子にも謝るんだ。君のせいで汚名を被る所だったんだからな」

「嘘じゃない」

「例えそうだとしても『君が』突き飛ばしたんだ。あの子じゃない。『君が』怪我を負わせようとしたんだ」

「嘘じゃない。あの子がそう言ったから」

「君は先生の言う事がわからないのか！？　君がしたんだから君が謝るんだ！　君が1人でやったんだ！」

自分は俯いていた顔をあげた。
全然真実を理解していない。そして理解しようともしない『先生』と呼んだこの人間が、一体どんな顔をしているのか見たくなった。

自分は見た。

罪を暴いたと決めつけて、『絶対にお前が犯人なんだ』と語った教師の顔を。
自分を見る目が前と違った。
前は誇らしげに自分を見ていた。

目は人程にものを言う。

その教師は『愚か者』と、自分を目線だけで罵倒していた。
そして『こんな本性を隠していたのか』と、毒々しげにその目が言っていた。
理解した。
『先生』なんていう人間は、本当に子供を見てるんじゃない。
子供を通して、自分の得る利益を見ている。
自分は、前は『先生』の名声を上げるいい材料だった。
それが今では問題の種。『先生』と言う肩書きの名声に傷がついた。

だからか。
それだけでこうなるのか。

教師の顔を見るのを止めた。

吐き気がした。
胸やけが襲った。
喉から有らん限りの声が出そうになった。
それを必死に押さえていた。
涙は出なかった。
頭が恐ろしく痛んだけれど、涙は流れてこなかった。

自分は見た。

教師の隣に立って勝ち誇ったような表情を浮かばせたあの彼女の姿を。

理解した。
か弱く見え、しかも賢い者が信用された。
自分のような単純な者は、最初から信用されなかった。

理由は頭の良し悪しと、教師への貢献度で決められたのだ、と。

沈黙に徹した自分を、教師は肯定と受け入れた。
本当は只、その教師を呆然として見ていただけなのに。

そして、決まったグループに入らず漂い気味で、しかも問題を起こした自らの利益には不要の自分を、教師は、後に『問題児クラス』と呼ばれる学級へ進級させた。

問題児クラスは、問題児だけではなく、教師も十分に問題が有った。

そこでは自分は勉強を真面目に取り組んだ。
問題児クラスにも頭の良い生徒がいた。
その生徒達が『出来ない』生徒を馬鹿にしながら適当な説明をつけてくれた。
それでなんとか理解する事が出来た。
わからない事を教師は教えてくれなかった。
授業もマトモにしていなかった。
授業に遅れるのは当たり前。授業中は教師は居眠りに徹した。
そんな教師の言う事にもきっちり従った。

そのクラスの中でも、友人と呼べる人はいた。
その子はクラスの子に虐められていた。
自分は、前してしまった事の罪滅ぼしの気もあって、その子に特別親切にしていた。

そして結局は転校する事になったその友人が言った。

「君って本当馬鹿だよねぇ。皆知ってるよ、君は馬鹿だってね」

やっぱりこういう所なんだな。ここは。
そう思ったのは必然だったと自分は思う。

またも、自分は裏切られた。
1度は舐めた苦渋は、2度目には自分に『慣れ』を感じさせた。

内心は呆然と嘲笑。
批判する気も失せるような状態。

そんなだったから、自分には勉強しかする事がなかった。
暇だった。
悲しい自由だった。

友達はもう作りたくなかった。
遊ぶのは寂しくなるだけだった。
絵を描いたら歪んで見えた。
だから本を読んだ。
毎日毎日図書室に籠った。
図書室の本は大半読んでしまう程だった。

遊んでばかりいた自分は何処にもいなくなっていた。

高学年になった。
教師は眼鏡をかけた狐っぽい男だった。
“また嫌なやつだ”
直感的にそう分かった。
そしてそれは事実だった。

そのクラスでもいじめは起こった。
虐められたのは自分ではなく、少し太めの女の子だった。
しかし自分もすれすれの位置にいた。
綱渡りの順番が、少しだけ彼女が早かっただけなのだ。

彼女の机は毎日、誰のかも分からない靴跡がついていた。机の中からは中傷の書かれた紙が１０、２０と出てきた。靴がいつの間にか汚されていた。
男子は彼女を見て「デブだ」「ブタだ」と笑った。自分がともに

遊んだ輩とは思えなかった。
女子は彼女を気持ち悪いと言って無視した。自分から言わせれば彼女が話しかけてもまるで誰もいないかのように振る舞う女子達が気持ち悪かった。

自分は何時も彼女の隣にいた。
毎日のように慰めた。
2人きりで遊んだ。
でも誹謗中傷はついて回った。

彼女は傷ついていた。

少し前の自分のように。

その教師は自分の昇進だけを考えていた。
子供にさえもその心うちを隠していなかった。
それを子供は敏感に感じ取った。
だから虐めても良いと判断した。
いじめても、証拠がなかれば良い。
もし証拠が挙がっても、もみ消せばいい。

それが教師と虐める側のルールだった。

彼女とは最高学年にあがっても同じ友好関係を続けていた。
それでも現状はほとんど変わっていなかった。

毎日、毎日。
彼女はたまに学校を休んだ。
そういう自分も、１週間だけ学校を休んだ。
事態は悪化する事が分かった。

そんな状態で、小学校生活が終わった。
クラスの女子の流す涙が、自分の目には下水のように濁って見えた。
涙が出るような良い教師、良い生活、良い友人に出会えたとは、金を積まれても言えないだろう。

中学に入って、少し。
最初の夏休みが近くなった。

外部生が増えて、前みたいな表に出るようないじめは減った。
いじめをする人が、その行為に飽きたと言った方が正しいかもしれない。
けれど比例して帰り際の下駄箱でそっと呟かれる悪口は段々恐ろしく悪意の籠ったものになった。

「死ね」
「まだこの学校にいたの？」
「下駄箱が腐る」
「なんで生きてんの」
「消えろ」

冗談では弁解できない域。

自分があの女の子にしたように、彼女に何をされた訳じゃないくせに言う人たち。

そんな中での生活。

彼女は言った。

「このまま過ごすのは、きっと辛いから、他の学校に転校する事になったの」

驚いた。

けど、当然だと思った。

彼女のような子が耐えられた環境ではなかった。

陰湿ないじめは元をたどればすべて何もないものから始まっていた。

それを自分たちは知っていた。

だから彼女の選択は当然だと思った。

このまま2年に進んだとしても、現状が良くなる確率は低い。

彼女は自分がこの彼女の選択を受け入れる事を分かっていた。

そして彼女がこの学校の名簿から消えてしまえば、自分との友好関係が終わる事も。

そしていつしか、彼女と言う存在が自分から消えてしまう事も。

自分と出会った時から、多分きっと分かっていた。

鬼ごっこ。
隣の校舎から聞こえる騒ぎ。
昔と同じ響きを持って。

今はしない大人数の『遊び』
自分は人と遊ぶのが怖くなったらしい。
今ふと思えば1人で遊んでいる。
こうやって昔を思い出して、1人で。

中学2年になって、仲間が出来て。
受験だテストだとにぎやかになって。

特に問題もない。
深く考えないようにしてるから。
浅い所だけ見て笑う。
いつも頭には嘲笑と呆然。
体の底には怯えが混ざり、本心は暴かれない笑顔をつける。

前ほどに深い所まで語れる人が誰もいなくなって。
知られたくないと思えば逆に、知ってほしいと思う矛盾が競って。
いつも笑っていれば、誰も気づかないと分かった。

無駄な命はないけれど、無駄に思う事は『悪い』けれど。
出来れば感情だけを抜き取って、生きられれば良いのにと思う。

自分は『信頼感』を失くしてしまった。
信用出来なくなっていた。
誰も気づかないからではなくて、自らがさらけ出せないからで、
人のせいじゃなく自分自身。
分かっているけれど、その信頼が戻らないことも分かってる。

信頼するという安心を、自分はもう感じられない。
信頼を受け入れられる心が歪んでしまったから。
だから頭にはいつも嘲笑。
乾いた不安の嘲りが聞こえる。

バスの中。
ガラスを通して見える風景。

あの頃から通う道は、何時も変わらない町並みが見える。
いつも通り、無言で乗り込むバスの中。
ふと、バスのなかでしゃべる高校生と小学生の幼稚な喧噪から目をそらす。

見えたのは、学校の少し手前の停留所。
高校近くのバス停の前、一軒の家屋の壁に咲き広がるそれら。

木を覆い塀を乗り越え、隣の家の庭おも覆い尽くさんとする花々。
青色に開く沢山の朝顔。
夏盛りの花。
向日葵のように華やかではないけれど、しとやかに夏を示すそれが、静かに咲いていた。
バスの中、誰もその朝顔を見ていない。
もう冬が近いのに、と思うより、その花は強く手を伸ばしているように感じた。

駆け抜けた夏を追いかける。
身を捩り手を延ばし続けて、花を散らしながらも手に入れようともがいている。
花を散らすのは次の機会を得るために。
手を伸ばすのはより強い望みを叶えるために。

そして今気づいて思う。
いつの間にか自分は、去る人を追うのを忘れたようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0116d/

朝顔の十一月

2010年10月9日06時39分発行